慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安井家の蔵書について：安井文庫研究之二
Sub Title	Yasui Bunko Studies : Study of the Yasui Family Library Collection
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002.) ,p.125- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安井家の蔵書について——安井文庫研究之二——

高橋　智

まえがき

本論集第三十五輯・第三十六輯に掲載してきた研究課題「安井家の蔵書について」は、本輯に「朴堂の蔵書」を掲載して、一応全体の締めくくりとする。安井朴堂（小太郎・朝康）は明治・大正・昭和初期を代表する漢学者であり、漢詩人であった。また、息軒の孫にあたり、滄洲以来、安井家の家学の三代目となる儒者であったとも言えよう。まとまった蔵書や原稿からその人の、あるいは家の学問を解明し、かつ顕彰しようとするこの研究は、とりわけ安井家の場合、意義ある試みであると言わねばならない。それが何故であるのかについては、その詳細な学問の実態とともに「解説編」に述べた。また、累代にわたる蔵書とは、どのような意味をもつのか、それは「目録編」にまとめ、そして、文庫の全体像を「書目編」で通覧できるように構成した。その、「解説編」の内の第四章に当たるのが本稿である。勿論、安井文庫の研究がこれで終わるわけではない。すでに、研究之一に於いて息軒の遺著「読書余適」の詳細な分析を行ったが、このような形で、可能な限り特色ある家書の研究・紹介に努めていきたいと考えている。それが、即ち、蔵書研究という課題をして書物文化研究のなかで占める位置をおおきからしめることに、一役を担えるものと信じるからである。

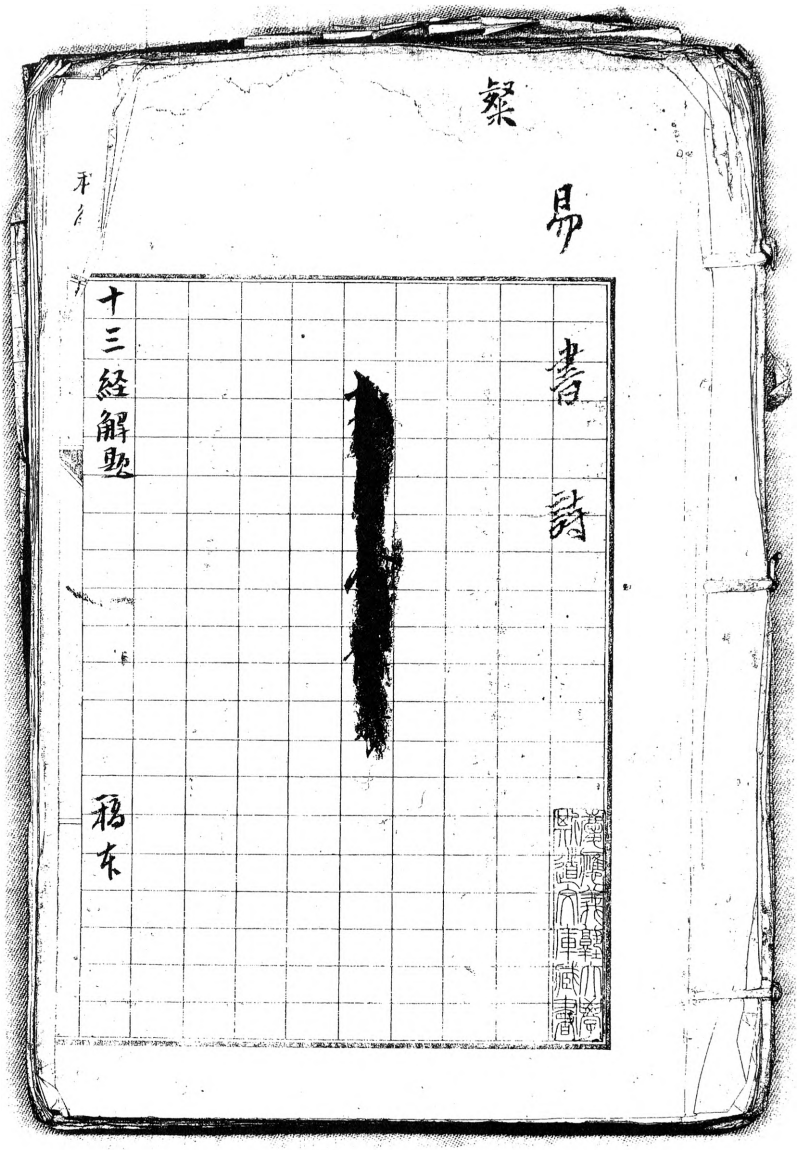
本稿には、不備な点や誤りも多いことであろうが、重ねてご教正を請う次第である。なお、名墓顕彰会の藤田吉秋氏、安井家のご遺族である安井敬義氏ご夫妻、安井紀子氏、また宮崎県清武町落合兼俊町長、同教育委員会伊東但氏には、多々お教えいただいた。ここに厚く御礼申し上げ、本稿を謹んで息軒先生の廟前に捧げたいと思う。

三十六年　四月

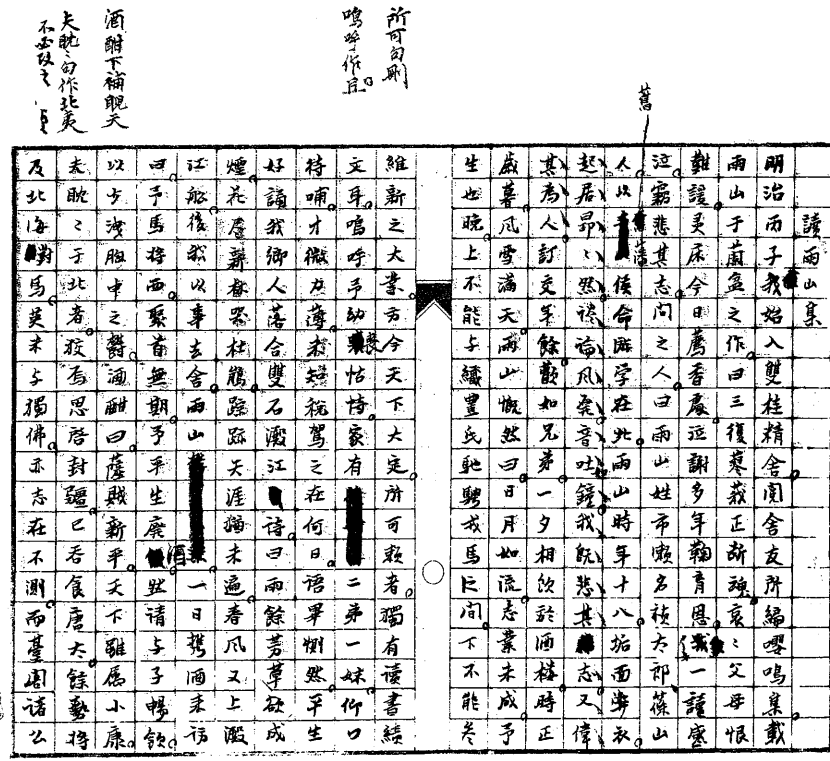
五日　午前六時発　新橋ヨリ鶯車　午後九時京都
着　小野[illegible]夫婦　妹江烈子　余等一行を迎ひて已に京都
に行り　停車場にて相逢ひ共に旅店吉岡に至る
六日　小野氏一行と嵐山に遊ぶ　閑々者已に七分大悲閣
にて午餐し帰途好心寺　仁和寺　金閣寺　北野内裡
大極殿　新京極を見物して帰る　立木生来る
七日　三十三日堂　大佛清水　高台寺　祇園　智恩院を
見物して平野屋にて午餐し一行と別れ草場先生家
を得ふ　夫人不在直に帰る　此日智恩院門前を萩
野由之氏に逢ふ帰寓して直に発し宇治に至り茶
碧樓に投ず　琴子は小野氏一行と黄檗（ハク）に行く
八日　奈良を見物して吉野に至り佛林院に投ず
九日　雨を冒して[illegible]院出で大坂に向ふ　午後三時湊町
に着く　小野氏一行と別れ北桃谷円頭に投ず
十日　午前小野氏一行来る　共に博覧會に行き午後
帰寓

萬寶齋

図一　「寓燕日記」稿本



図二　未刊稿本「十三経解題」表紙



図三－① 「讀雨山集」原稿

可刪似可

不起似不可直以為死

讀作已。

酬歌醉舞之不暇。予恐國家異日之患將在疆場。然
猿鶴待予久矣。姑歸故山養予志。[redacted]徐圖報効而已。
因高吟老杜詩曰。獨教至尊憂社稷。諸公何以答[redacted]丹
手。時我亦有西歸之計。約京師再逢而別。其後時事
大變。兩山以教職庭游東西者二十餘年。皆不得志。
晚歸鄉為篠山中學校長。戊申春疾作。數日[redacted]遂不起。
享年四十有九。頃者仲弟某甫。刻其詩文若干首。見
贈一本。受而讀之。軒昂之容。落落之志。与夫濟世憂
時之念。躍然於楮表。嗟夫兩山。命途多蹇。事与志違。已
一官落托。懷抱利器而歿。使我[redacted]歔欷[redacted]不能[redacted]

者。豈非此卷耶。悲夫。

才筆可以傳才子

文格頗似清初名家蓋朴堂集中變調者

寬安評

感愴嗚咽不堪再讀

資言安評

安井小太郎 撰

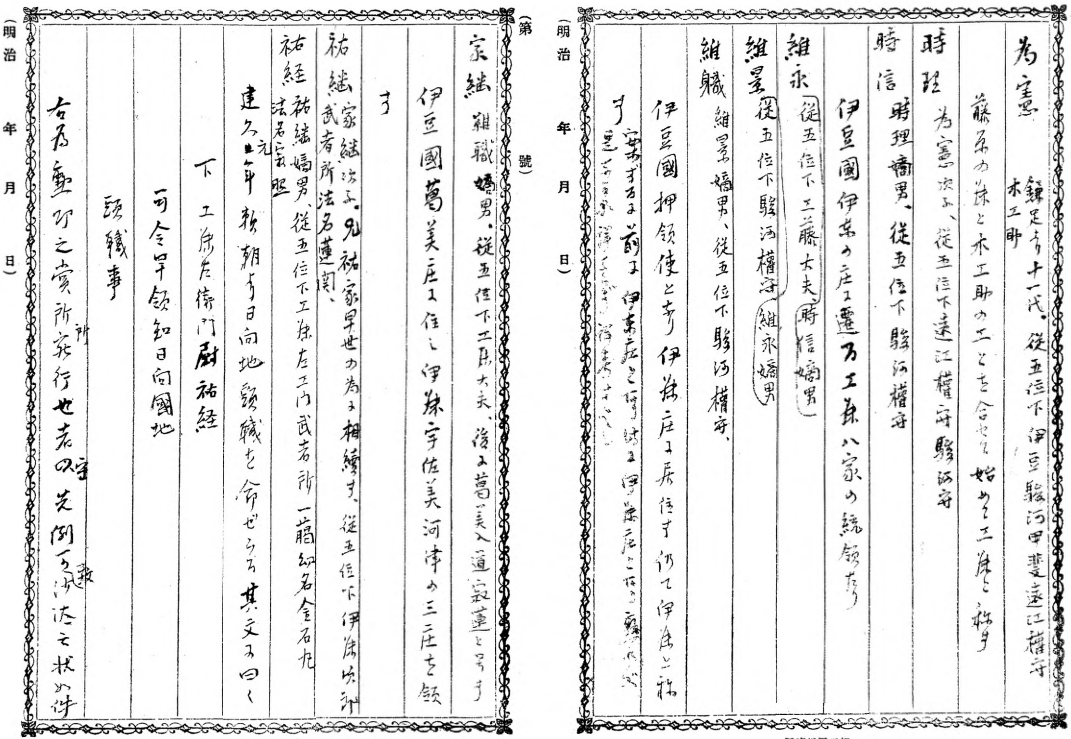
無拜讀

[illegible]

[illegible]

十行二十

図三－②



図四　「伊東氏の系譜」に関する原稿の一部

目次

目録編

安井滄洲旧蔵書

安井息軒旧蔵書・抜抄本・自筆稿本

安井朴堂早年蔵書

解説編

第一章　安井家の蔵書構成

第二章　滄洲の蔵書

第三章　息軒の蔵書

第一節　蔵書

第一項　唐本の購入

第二項　昌平校・天保年間の読書・附録

第三項　和刻本への書き入れ

第四項　師友と蔵書

第二節　著書

第一項　書経

第二項　詩経

第三項　礼

第四項　春秋左氏伝

第五項　四書

第六項　戦国策

第七項　管子

第八項　旅行記

第九項　随筆

第十項　その他……（以上、第三十五輯掲載）

附録　班竹山房蔵書目録翻刻……（第三十六輯掲載）

第四章　朴堂の蔵書

第一節　経学……一三二

第二節　日本儒学……一三八

第三節　漢詩文……一四二

附節　朴堂と清武……一五一

書目編……（以下、第三十六輯掲載）

解説

分目

書目

頁

解説編

第四章　朴堂の蔵書

滄洲先生・息軒先生の場合と違って、ここでは、経学・日本儒学・漢詩文と三つのセクションに分けて蔵書を論じることとする。では、何故、この三つに分けるのか。それは、それなりに意味があってのことなのである。勿論、朴堂の学問が経部以外の、史・子には至らなかったということは意味しないし、また、息軒先生等、江戸時代の学者にこうしたジャンルを被せるのは、あまり意味がないように思われるということもある。

江戸時代の学校（藩校・家塾）では、経を学ぶことは勿論、歴史や諸子など文武すべてが課せられたわけであるから、大成した学者にあっても、専門は何という括り方はあまり説得力がない。しかし、朴堂は、その伝統的学統を受け継ぎながら、江戸時代の学者が殊更に、大系的には論じなかった、経書の歴史や江戸時代の儒者の歴史と意義について等を講じ、漢学を近代的な形に作り上げた人であった。つまり、朴堂等、当時の漢学者のそうした努力があったために、現在でも、漢学を一専門分野として学ぶことができるのだと言っても過言ではないのである。

それだけではない。朴堂等は、斯学の隆盛がにわかにかげりだした時代を目の当たりにし、西洋化に押されて文運の衰退するのをくい止めようとして、先哲の遺文を再評価し、詩文を研鑽して伝統的文化を守ろうとしたのである。そして、大事なことは、これらの営為がみな民間の力に拠っていたと言うことである。

確かに、朴堂の学問をセクションに分けるなどということは、烏滸がましいことではあるけれども、こうした、当時の漢文学の歴史的意義を顧みるときに、現代の漢文を学ぶ者から見てどうしても忘れてはならない、明治漢学の趨勢という意味において、かかる三つの節目に分けて論じることとしたのである。

第一節　経　学

第一章で述べたごとく、安井文庫の総体の大半は、朴堂安井小太郎の蒐集に係る物である。家学であるから、自ずとその内

容は知り得るわけであるが、蔵書ではなく、家に遺した原稿の類もまた、朴堂の学問を知る上で大切な資料であることはいうまでもない。そこで、ここでは、蔵書目録には、収載出来なかったこれら新収の資料も含めて解説していくこととする。

朴堂の経歴の大概については、既に第一章で述べてあるが、昭和十三年（一九三八）四月二日、八十一才で没した後の七月に、友人の、君山瀧川資言（亀太郎）が撰した「朴堂安井君墓誌銘」をここであらためてみよう。

「君、諱は朝康、小太郎と称す。朴堂はその号なり。日向の人。安政五年六月十九日江戸に生まる。考（ちち）は中村君貞太郎。勤王の志士なり。妣（はは）は安井氏、昌平黌教官息軒先生の長女なり。齢甫（はじ）めて六歳、考、獄中に死するに逮（およ）び、外祖父の鞠育する所と為り、因ってその氏を冒す。明治九年、島田篁村夫子の門に遊び、十一年、草場船山に京都に従う。十五年、東京大学古典科国書科に入り、才識優長、学に造詣あり。擢（ぬき）んでられて学習院助教となり、旋（つい）で教授に進む。三十五年、北京大学堂の聘に応じ、その教習と為る。四十年、還りて第一高等学校教授に任じられ、累（かさ）ねて高等官二等に陞り、従四位勲四等に叙せらる。大正四年、官を辞し、大東文化学院教授を以てその教頭と為る。又、書を東京文理科大学・二松学舎・駒沢大学に講ず。昭和七年、宮中の講筵に尚書皐陶謨を進講す。十三年四月二日病没す。享年八十有一。朝廷、その多年の教育の功を賞し旭日章を賜う。釈謚して朴堂素愿居士と曰い、多摩墓地に葬る。君、祖業を承け、尤も経術に邃（ふか）し。又、詩文を能くし、著すところ、本邦儒学史・秦漢至南北朝経学史・経学門径・学庸論語講義録・曳尾集等有り。配は島田氏篁村夫子の長女、五男五女を生む。次男次郎、後を承く。三男三郎、息軒先生の家を嗣ぐ。予と君とは学ぶにその師を同じくし、相識ること最も久しきを以て、その墓誌を請う。乃ち行事を略叙し、之に繫（かく）るに銘を以てす。銘に曰く、

聿修して愆（あやま）らず、祖業維（こ）れ光（おお）いなり、累世の経学、千古香（かお）る」

恩師島田篁村（重礼）についても、第一章を参照していただきたいが、ここでも、朴堂の祖父息軒と、篁村の師・海保漁村が、松崎慊堂の同門であったことは、重ねて強調しておかなけ

ればならない。林述齋の門弟として朱子学を奉じながら考証学的学風によって影響力を持った慊堂の学問こそが、ひいては朴堂等明治を代表する漢学者の学風そのものであったと考えられるからである。入門した明治九年は、朴堂十九歳、篁村三十九歳である。九月二十三日に祖父息軒が没し、その十一月のことであった。「篁村遺稿三巻」（大正七年）が安井文庫中に存する。また、目録編の【朴堂早年蔵書】に著録した「三蘇全集」は、「島田氏双桂園蔵書記」なる印記を捺す篁村旧蔵書である。おそらくは、門下生として朴堂が頂戴したものと推測される。篁村の蔵書は、静嘉堂文庫に八百六十二冊を所蔵する外は、各所に散在する。明治の末、大正期に中国の蔵書家が買い求めたものも少なくないし、そのうち再び日本に戻ってきたものもまたしばしば見うけられる。価値の高い善本ばかりで、一般に「篁村島田氏家蔵図書」と言う蔵印を用いる。「三蘇全集」の蔵印は珍しい。

同じく【朴堂早年蔵書】に「珮川詩鈔四巻」が見えるのは、おそらく、草場船山塾に入塾した証であろう。船山は、明治二十年に六十九歳で没するので、十一年朴堂がやって来た時には既に還暦を迎えていた。珮川はその父、慶応三年八十一歳で没している。それぞれ古賀精里・侗庵の門下であった。安井文庫にはまた、明治二十四年に出版された「船山遺稿二巻」も収められている。船山については、平成九年に出版された「草場船山日記」（文献出版）の、荒木見悟氏の解説に詳細である。

明治三十五年（一九〇二・光緒二十八年）に北京に渡った。この頃、北京は、前々年の義和団事件も落ち着き、新たな改革を目指している時で、教育制度の建て直しに協力するために、北京大学堂で教鞭を執ったのである。服部宇之吉（朴堂の義弟にあたる）等の主動でその事業は進められた。この頃の事情は、「服部先生古稀祝賀記念論文集」（昭和十一年・富山房）の「服部先生自叙」に詳しい。

今、当時の朴堂の日記である「寓燕日記」二冊が遺る（図版一参照）。明治三十六年四月五日から三十七年六月十一日までが一冊、萬寶齋の紅い罫紙に墨書する。第二冊が同年六月十二日より、三十八年六月二十五日までで、文茂祥と版心に刻む紅色罫紙に墨書する。この日記に拠れば、朴堂は三十六年の四月五日に新橋を発ち、京都に向かっている。（ここで草場先生をも訪れている）さらに十四日神戸に向かい、十八日午後四時の船で旅順に出発した。途中、釜山、仁川を経、三十日旅順に到

着。塘沽を経由して汽車で北京入りしたのが五月三日。『服部夫妻出迎え居られ、直ちにその寓に至る。家を出てより二十九日を費やし、始めて北京に入れり』と記している。これを以て見れば、朴堂が北京に渡ったのは、明治三十六年のことであり、墓誌に三十五年というのは、如何なることを言うのであろうか。とまれ、こうした当時の記録は読んでいて興味が尽きない。いずれ全貌の翻字も期したいと思うが、ここでは書物に関する記事を幾つか挙げてみよう。到着後、早速、大部の叢書を購入しているのが先ず目にとまる。

『六月六日。書肆寶萃堂、〈通志堂経解〉を持参す。價百四十元なり。〈皇清経解〉正続と全て二百六十元。五ヶ月にて払う約束にて買ひ六十元を渡せり』

今、安井文庫に現存するものがこの時のものに違いない。また、この頃、張之洞に会見することがしばしばであった。『六十六歳と言うが、少し老衰の容子なり』と記す。張氏には「書目答問」がある。光緒二年（一八七六）の初刊で、若い学生が読書を通じて、経史の学や詞章考拠の学を修めるために必要な二千二百種にのぼる書名を列挙したものである。これに似て、朴堂は、後年、大東文化学院学生の請により、「経学門径」（昭和八年初版・松雲堂書店）を著した。十三経を学ぶ者の参考書を示し解説したもので、「皇清経解」正続編から多くを選んでいる。朴堂のこうした教育における貢献は、「漢文大系」の編纂や「崇文叢書」の編集など明治・大正期の漢文学の発展に大きな力を果たした。

有名な書誌学者、島田翰は、朴堂の外弟（妻・琴子の実弟）にあたる。六月二十六日、翰が来華するので、塘沽まで出向いている。七月二日、翰は瑠璃廠にいっている。翌日には、文求堂田中慶太郎が訪れてきた。翰は田中氏と東京外語の同窓であるから無論必然的な出会いなわけであったが、おそらくは、この来華を機に、翰は大陸の蔵書家と渡り合い、明治四十年には「皕宋楼蔵書源流考」を出版、陸心源皕宋楼の蔵書が日本の岩崎氏にわたる際の一役を担ったりもした。本書の朱印本（初印）が安井文庫に伝わっている。

外に次のような記事もある。

『八月二十六日、書估趙平甫来。自ら言う、市村器堂（瓚次郎）を識る。現住瑠璃廠文昌館飴山堂、携へる所、〈魯公集六本〉十元明版、〈銭注杜詩〉八本十元、〈武渓集〉六本三十元明版、〈王文恪集〉四本十元』

『八月二十九日、昨日書估趙来。〈銭注杜詩〉を八円にまけろと言ひしが応ぜず。宋版覆刻の〈駱賓王・呂元賓集〉合刻は四本にて三十円と言ひ居れり。又、醇親王・翁方綱の蔵書印ある〈杜詩千家注〉ありしが、蔵書印には用なしといひたれば笑ふて居たり。』

まさに朴堂の蔵書を物語っているような話である。

さて、こうして帰朝後、第一高等学校に教鞭をとり、東京高等師範・大東文化学院など、その後の教場にあっても一貫して朴堂が講じたのは経学であって、十三経を中心にした解釈や歴史であった。祖父息軒は、「十三経注疏」に句読点を加えて通読しているが、訓点を書き入れることは無かった。朴堂の書き入れは、綿密で正確な返り点送り仮名が施されているところに特徴がある。「漢文を正しく訓読する」これが明治・大正期の漢文学の至上の命題であったのであろう。そうしたなかで、朴堂はその命題のみに止まらず、「十三経」の一つ一つについて、その成り立ちや受容といった、歴史的な意味における経学研究にも新たな道をつけていった。経学史という学問の、近代日本におけるまさに草分けであったと言えるであろう。

中国では、清末に皮錫瑞（一八五〇～一九〇八）が「経学歴史」を著し、光緒三十三年（一九〇七＝明治四十年）に発刊され、ほぼこうした学問の基礎を築いた。同時代に日中で同じ学問を切り開く学者が出るというのは、版本学にあってもその例を見ることができるのであって、現象としておもしろい。

昭和七年（民国二十一年）に大東文化学院創立十周年を記念して、「経学歴史連続講習会」が開かれた。朴堂の外に、諸橋徹次・小柳司気太・中山久四郎が講義をおこなった。講義録は昭和八年に松雲堂から出版されたが、そのなかで、朴堂は、「先秦より南北朝に至る経学史」を講じ、孔子が六経を刪定したと言う皮氏の孔子刪定説を否定している。このように、深く新しい学問も、やはり江戸時代以来の学者の流れをひいているのであろうか、まとまった書物として著すことはなく、講義録として遺るのが、朴堂の場合、大半である。

昭和十四年、朴堂の没後に富山房から出版された「日本儒学史」の末に付す「朴堂先生著述論文目録」によって我々は、その大概を知ることができるが、しかしそれは容易に見得るものばかりではないのが、誠に遺憾である。そこに示された、経学史関係の論文を挙げて見ると、

礼記解題（国訳漢文大成・国民文庫刊行会）大正十

正平版論語解題（斯文会）大正十一
春秋正義解説並欠佚考（東方文化学院）昭和八
古文尚書考（経史説林）明治四十一
周礼考（同右）明治四十二
鄭注論語及集解本に就きて（東亜研究）大正三
敦煌本経典釈文音義跋（東洋文化）大正十二
毛詩詁訓伝（斯文）大正十四
延徳本大学跋（東洋文化）同右
論偽古文孔伝一・二（東洋文化・斯文）大正十五
論語孔注弁疑上・下（斯文）昭和二
慶暦正学派（高瀬博士還暦記念支那学論叢）昭和三
朱子の経学（大東文化）昭和六
毛詩詁訓伝撰者考（支那学研究）昭和八
経学研究の方針（大東文化）昭和八
孟子解題（大東文化）昭和十二
周礼解題（同右）同右
礼記解題（大東文化）昭和十三

等である。

また、未発表にして、長く家に蔵されていた稿で、今、斯道文庫に所蔵されているものに、次の経学史稿がある。

十三経解題（易・書・詩）（図版二参照）
易解題略
河図洛書
易学及沿革
古文尚書に関する疑・先儒の説・鄙見
詩解題略
続詩疑
儀礼解題（また別に、儀礼）
春秋解題
春秋隠公に始まる弁及詩亡然後春秋作説
春秋の作者に就いて
孝経
鄭王異同弁の叙論
敦煌本論語鄭注考一、二
論語説義
論語集解注家考異
論語解題
訓詁学の源委

縮刻十二経
西漢古今学を論ず
漢籍を語る

これらは皆、後学を益するものであって、全体の翻刻を待つべきものである。

尚、経学史にまつわる書物の安井文庫中に存するものは、分類の二十五を参照していただきたい。

第二節　日本儒学

朴堂は、晩年、日本儒学の権威と評されていた。前述の如く、没後、門弟によってまとめられたのが一冊の「日本儒学史」であったことは、何よりもそのことを物語っている。そして、本書の末に付された「安井文庫日本儒学史関係蔵書目録」をみれば、その蒐集した資料の広範さに驚かされるであろう。無論、これらの資料が、全て現在の安井文庫に遺されているのであって、分類番号の二十二のAからLまでがほぼこれに当たるものである。全部で五百点以上、安井文庫全体の約三分の一を占める量である。

そもそも日本儒学と言うのはどういう学問なのかについては、かなりの言及が必要であるが、ここでは、それを論じるのが目的ではないので、簡略に問題点のみを述べて、朴堂の学問の意義についてふれておく。

朴堂の「日本儒学史」の序文に、服部宇之吉が次のように述べている。

「日本儒学史と云ふ語に二の義あり　一は日本儒学の史にして他は日本の儒学史なり　儒教東漸夙に吾が固有の皇道と融会し渾然一道を成せり　即ち日本儒教是なり　徳川氏武を偃せ文を修むるや文教鬱然として起これり　諸派の儒学鐫を騈へ併せ馳す　曰く南学　曰く京学　曰く水戸学　曰く王学　曰く古学　曰く折衷学　而して徳川氏程朱学を以て之を統制す　此等諸派の儒学につき其の由来特色等を明らかにするものを日本の儒学史と為す　即ち日本における儒学の歴史たり」

つまり、日本儒教の研究ではなく、江戸時代の儒学の研究であると、朴堂の著作の定義を語っているのである。

日本儒教の研究と言うのは、政治・社会・宗教・道徳といった範疇から孔子の教えやその受容史を研究するもので、服部氏も「儒教要典」などを編纂している。例えば、昭和九年の雑誌

「大東文化」は日本儒教研究号としている。ここに、朴堂は、「徳川時代儒教概論」なる稿を発表の予定であったが、「和魂漢才に就いて」と言う小文の掲載に止まっている。こうした現象は、ほかに、「日本儒教論」（萬羽正朋・昭和十四）「日本儒教概説」（岩橋遵成・大正十四）等の出版にも見られるが、要するに、この時代、日本儒教と言う言葉・概念が流行していたということがあって、朴堂もそれに連なろうとしたのであろうが、じつは、朴堂は、純粋に考証学的な漢学者であったことから、後に儒学史と、自著に名付けたのであったろう。

また、井上哲次郎らが日本儒学の著作を「日本倫理彙編」として整理した学風も或いは、明治期にあって、新鮮なものとして歓迎されたのかも知れないが、かかる新しき風潮も朴堂には有縁であったとは言い難い。それも、蔵書から察しうることである。

それでは、日本儒学史と名付けられた研究はどうかといえば、古く、久保天随によって出版されていた（明治三十七年・博文館）。しかし、儒学史という概念についての姿勢は、朴堂とはやや異なっている。無論、朴堂が、本書の一部を公開したのは、明治二十七年（漢文書院）であったから、かかる分野の専著として草分けの創業を為していたという事実には、異論の無いところである。久保氏は、明治四十年に、別に「近世儒学史」を上梓、先の著書と合わせ完結を成した。即ち、儒学の変遷を三大期に分かち、一、上世期―漢学講習時代　二、中世期―宋学輸入時代　三、近世期―諸学競起時代　としたのである。

これに対して、朴堂は、「日本儒学史」の緒言のなかで、「我が国の儒学史としては、徳川氏初期を以て創始と為さざるを得ず」とし、室町時代以前の学者に儒学研究の専家たるを証すべき著書の遺らぬことを以て、これらを儒学史の項目に列しなかった。そして、これら、中世以前の漢学を「日本漢文学史」としてまとめ、「日本儒学史」の附編として遺しているのである。こうした考え方の背景には、単なる便宜上の整理分類という枠組みではとうてい理解出来ない、漢学者としての伝統を受け継ぐ学者にしてはじめて為し得る深い意義が込められているに違いない。

兎も角、朴堂によってこの学問の基礎が築かれてから、近世の漢学史の研究は目覚ましく発展した。西村天囚の「日本宋学史」「学界の偉人」、寺石正路の「南学史」等、個別の学派研究や、関儀一郎の「近世儒家史料」「近世漢学者著述目録大成」、

竹林貫一の「漢学者伝記集成」等の伝記類の研究、斯文会の「日本儒学年表」、斉藤憲太郎「近世儒林編年志」等の編年研究、と、見るべきものが出版されている。中世の儒教にとりわけ緻密な研究を果たした足利衍述の「鎌倉室町時代之儒教」は異彩を放つものであったことも附言しておかねばならない。また、その後、「日本儒学史」と名付くものに、昭和十六年刊行の高田真治の著作があった。

さて、このように朴堂が位置づけた儒学研究の更なる源委を辿るならば、それは、昭和十年に「大東文化」第十一号に朴堂が翻刻した、「学問源流」と言う書に遡ることができるであろう。

翻刻の首に附された朴堂の説明をここに挙げておく。

「那波師曾、魯堂と号す、播州姫路の人、活所の玄孫なり。年十七京師に遊び、岡龍洲白駒に就学し漢唐の古学を治む。晩年程朱学を専攻し其の名稍く顕れ、阿波蜂須賀氏に聘せらる。寛政元年九月没す。年六十三。著す所学問源流、道統問答あり。道統問答未見。学問源流は徳川時代儒学諸家の大綱を概挙し、当時の形勢を知るに便なるを以て、附録として茲に頭注を附し、上梓す。」

また、同じく朴堂の末尾に附された評語に言う。

「詩文の論は要領を得たり、闇齋仁齋徂徠に対する批評も稍可なり、程朱を称揚する所過大の嫌あり、唯其当時の学問流行を説く事詳密なるは大に取るべし。」

本書の底本は、安井文庫の天保四年版である。おそらくは、恣意的な議論を含みつつも、儒学史を通覧した江戸時代の珍しい著作であって、朴堂の意図したところにかなった最も古い論文であった。

安井文庫に「本朝異学問答」（吉川亀庵）一冊がある。徂徠学に反論するものである。こうした、個個の学問の論争は、江戸時代中期以降頻繁になるが、それに注目して、ひとつひとつ分析し位置を定めていくのは、困難をきわめる学術である。例えば、本書に朴堂の識語があり、「徂徠没後二年、専著を成して徂徠を排するは、此を始めと為す。」と評している。

このように、「日本儒学史」一書には現れない、日本の儒学の歴史上に、玉石のようにぎっしりと詰まった多くの資料について、丹念に分析を加えた跡が、安井文庫朴堂の旧蔵書には見られ、祖父息軒とはまた違った意味で、精緻な実用的な蔵書を為しているのである。

しかし、なんと言っても、儒者の伝記資料が必要不可欠であることは、言うまでもない。その先鞭を付けた原念齋の「先哲叢談」、東條琴台の「先哲叢談後編・続編・年表」は、朴堂の書き入れ朱点が見られる。のちに、こうした資料から、朴堂は、「日本朱子学派学統表」等を著して、学派系図の先駆を為した。みずから、儒者の碑文等を録出している稿も遺っている。

また、儒学史研究と相俟って、江戸時代の儒者の、未刊、或いは刊刻されても流布稀であった著作について、翻刻出版を企図する向きが俄に勃興したことは、大正・昭和初期の日本儒学研究が際だって発展する原動力となった。

大正十四年から昭和七年にかけて、二十三種類の未刊稿本を和装の鉛活字で翻刻した「崇文叢書」第一輯・第二輯、そして、大正十四年から昭和五年にかけて正・続合わせて四十種類の名著を、洋装活字翻刻した「日本名家四書註釈全書」が、即ちそれである。前者は、崇文院、後者は、関儀一郎によって発行された。

朴堂は、この何れにおいても重要な役割を果たし、安井文庫本の提供はもとより、解説・校訂にいたるまで尽力している。「崇文叢書」においては、祖父息軒の未刊稿本「書説摘要」「毛詩輯疏」を翻刻し、出版後にも自ら朱にて校訂を加えている。そして、太宰春台の「紫芝園漫筆」、増島蘭園の「夏小正校注」「読左筆記」については、安井文庫本を校訂に用い、また、朝川善庵の「楽我室遺稿」はその稿本を舘森袖海に提供した。「書説摘要」「紫芝園漫筆」「夏小正校注」には、それぞれ解説を漢文で記している。さらに、松崎慊堂の「全集」、古賀侗庵の「侗庵非詩話」、藪孤山の「崇孟」については、その校訂に与っている。崇文院と言うのは、小室翠雲が開いたものであるが、如何なる組織であったかについては詳らかにしない。おそらく、舘森氏等を中心とした同人組織であったのではなかろうか。

その全く同じ頃、「四書」の日本人註釈書の翻刻が、東洋図書刊行会と称する、関氏によって開始された。それは服部宇之吉、島田鈞一、安井小太郎の、篁村門下三先生の監修で編纂された。

こちらの趣旨は、未刊稿本だけでなく、刊本があっても翻刻し、更にその刊本を校訂、また訓点を改訂するもので、まさに定本と為すべき体裁であったと言えよう。

朴堂が与ったのは、次の通りである。伊藤仁齋「論語古義」

には解題、佐藤一齋「論語欄外書」は、安井文庫本を校訂に提供、また解題、亀井南冥「論語語由」、猪飼敬所「論語考文」、市野迷庵「正平本論語札記」に解題、皆川淇園「論語繹解」、吉田篁墩「論語集解考異」に解題、豊島豊洲「論語新註」に解題、東條一堂「論語知言」に解説、伊藤仁齋「孟子古義」、佐藤一齋「孟子欄外書」、猪飼敬所「孟子考文」、広瀬淡窓「読孟子」にそれぞれ解題、中井履軒「孟子逢原」、冢田大峯「孟子断」に解題、伊藤仁齋「大學定本中庸発揮」、中井履軒「大學雑議中庸逢原」、古賀精里「大學章句纂釈大學諸説弁誤」、朝川善庵「大學原本釈義」にそれぞれ解題、佐藤一齋「大學中庸欄外書」に解題という具合で、解題だけではなく、殆どの校訂を自らが行っているのである。そして、ここに収められる全てのテキストについて、今、それを、安井文庫に求めることができるのである。

更に、特徴的なこととして、付け加えておかなければならないのは、儒学者の文集・遺稿が網羅的に集められているということである。日本漢詩文集は、現今、整理研究が進んでいるが、そうした文学的な趣旨や個別的内容研究とは違った意味で、儒学の業績と相対的に参照しうる儒者の文集が網羅していることで、唯に、研究の利便が与えられるというだけではなく、蔵書を、いや、その目録を通覧するだけで、日本儒学史の流れを把握することができるのである。目録の分類番号、二十二のBからLまでがそれに相当する。そのひとつひとつは、伝本の稀なものはもとより、学統を見据えた、系統だった収集であり、余人のよく為し得るところでは無かったであろう。

従って、第一章に述べた如く、儒学研究の小宇宙を形成しているこの蔵書構成は、実に淡々と、学問と書物の連鎖を示しているところが、奥ゆかしいのである。繰り返すようであるが、息軒の蔵書も然り、人柄をそのままにあらわしているものと言うべきであろう。

第三節　漢　詩　文

明治・大正・昭和初期の漢詩文界は、中国の文人達との交流も盛んであったことから、非常な発展を遂げた。自作の漢詩文をそれぞれが批評しあい、また、先師や友人の遺稿が夥しく編纂され、その結果、鉛活字印刷の漢詩文集が大いに流行した。なかには、日下勺水の「鹿友荘文集」のように倣宋活字を用い

た優雅なものもみられた。題材は、伝記から学説から叙事、叙情と多岐にわたるが、向けられる力は、その題材の選択よりもむしろ、如何に洗練された漢文に仕上げるかというところに注がれていたようである。

朴堂も、この時代の漢学者として、経学・日本儒学の研究とともに、漢詩文を事とする文人達と交わり、作詩作文の発展に大きな貢献をなしていた。安井文庫の中の、分類番号三十八Cの七に収載される百点あまりの近代漢詩文集は、当時の漢詩文界の隆盛とそれに対する朴堂の貢献を充分に物語るものである。

「大正詩文」を発刊していた雅文会の編纂、中国の文人と詩文を競いあった藝文社発行の雑誌「東華」の顧問、久保得二・古城貞吉らの雑誌「迴瀾集」の同人、等、関わった文人達は全て漢学会を代表する名士であった。こうした朴堂の立場は、滄洲先生以来の、読書だけではなく、学問の実践としての治世と作詩文にも精力を傾けると言う家風を、そのまま継承しているものと伺える。

そして、晩年、昭和十二年自ら出版した漢詩集「曳尾集」と朴堂の没後、昭和十五年に出版された「朴堂遺稿」とによって、その作詩文の姿勢と方向は、余すところなく後世に伝えられているのであるが、先ず以て、その姿勢とはどのようなものであったのかについて、ここで、聊か強調しておかねばならないことがある。

そこで、今、ここに朴堂の作詩文の原稿が、新集の資料としていくつか遺されているので紹介しておこう。

「巻石説」（遺稿未収）
「同右　二稿」（遺稿未収）
「読雨山集」（遺稿巻四所収）（図版三参照）
「読楊雄伝」（遺稿巻四所収「書楊雄伝後」）
「読伯夷伝」（遺稿未収）
「詩笠説」（遺稿巻二所収）
「倚廬亮陰」（遺稿未収）
「酒井忠勝論要害」（遺稿未収）
「訳文」四種（遺稿未収）
「訳文一則」三種（遺稿未収）
「土屋忠吉」（遺稿未収）
「房総遊乗序」（遺稿巻三所収）
「村岡賚卿六十一寿序」（遺稿巻三「寿村岡賚卿周甲序」）
「信長罵酒井忠次」（遺稿未収）

「後藤又兵衛説渡河」（遺稿未収）
「信濃前司行長著平語」（遺稿未収）
「豊公評右府」（遺稿未収）
「賛豊太閤」（遺稿未収）
「紀成瀬小吉事」（遺稿未収）
「紀東照公言」（遺稿未収）
「邪不勝正」（遺稿未収）
「秀吉天助」（遺稿未収）
「豊太閤告高山国国主文」（遺稿未収）
「峰青嵐寿詩並序」（遺稿未収）
「昌幸詭計敗北条軍」（遺稿未収）
「読覆性弁」（遺稿未収）
「東福寺忠魂碑」（遺稿未収）
「日向大観序」（遺稿巻三所収）
「紀稲葉一徹事」（遺稿未収）
「陸軍中将男爵石本新六君行述」（遺稿未収）
「涵詠余話」（遺稿未収）
「送小村長城赴北京」（曳尾集所収）
明治十一年から昭和九年までの詩稿多数

以上がそのリストである。

例えば、その第三番目に挙げた「読雨山集」一文について見てみよう（図版三参照）。雨山は市瀬雨山。明治九年、息軒先生他界とともに島田氏双桂精舎に入塾したのが、朴堂十九歳であった。その時に、丹波篠山から入塾していた雨山が十八歳であった。朴堂と意気投合し、「訂交年余。歓如兄弟」であったと言う。しかし二年後、朴堂が京都へむかうため、離塾することとなり、雨山も郷里に帰ることを決めた。京都での再会を期して別れた。その後、時代も大きく変わり、ついに、雨山は、明治四十一年病をもって四十九歳で没した。かつての日を思い出して悲しみを深くする朴堂の一文である。

原稿は、藍色刷りの罫紙に墨筆でしたため、さらに句点を加えたものとなっている。そして、今、ここに遺された原稿について全てがそのようになっているのであるが、何色にも亘る筆で丁寧に批評が加えられているのである。「読雨山集」には、字句についての評語に加え、最後に閲者の署名が為されている。

「才筆もって才子を伝ふべし」と、中村櫻渓。「文格頗る清初の名家に似たり、蓋し朴堂集中の変調なるものなり」と、日下勺水。「感愴ましく嗚咽、再読に堪へず」と、滝川君山。外に、

福井学圃、石幡貞、土屋鳳洲、（「多」は、松本豊多か）等が拝読した旨しるしている。

こうして推敲を加えて切磋琢磨するのが文人の楽しみであったことが伺える。無論、発表を前提にというものではなく、批評を加えあうその事自体に意味があったのである。この風流な営為は、当時の一般的な流行であったことは、疑うべくも無いが、生々しい様子を伝えるこのような原稿が遺っている例に遭遇することは、けして多くはないであろう。

そして、強調しなければならないのは、この姿勢が、「安井文庫研究之一」に解説した、安井息軒の「読書余適」に塩谷宕陰と木下犀譚が批評を加えている、あの姿勢と、形式的にも理念的にも、全くあい通じるものが感じとれるということなのである。息軒はその後、文会と称するそうした添削会を様々な情報交換会に発展させ、幕末の政治に対しても一定の意味を持たせたのであったが、明治も太平の世になると、政治的な意味は全く無くして純粋に学問と文学を楽しみあう風潮があらわれ、そしてその風潮こそが、明治・大正期の漢文学の水準を最高潮に達せしめた原動力となったものである。そして、その原動力を辿るときに、江戸時代末期の儒者の動向に行き着くことこそが、近代の漢文学の歴史を論じる上で、それなりの意義を持つことであると言はなければならないのである。

それは、明治という新しい時代がやって来ても、江戸時代の学問はけして無くなってしまったわけではなく、また、姿を変えたわけでもない、そのままに受け継がれ、漢学を身に体する事において何等変わることはなかったと言うことである。

朴堂の、この作詩・文の資料は、そのことを如実に物語っていると言えよう。

＊　＊

それでは、ここで、朴堂と関係が深かった人や、朴堂が序文を寄せた人の詩文集のいくつかを、安井文庫のなかから紹介しておこう。

「学圃逸民集三十巻」福井学圃撰　昭和七年刊

朴堂は、序文を寄せている。学圃は大正七年五十一歳で病没した。その時朴堂は六十一歳。朴堂が北京から帰国して「以文会」という作詩作文の同人会に入ったときに村岡櫟齋の家で知り合っ

た。学圃は岡本黄石に学ぶ。大島怡齋、秋月天放と親しく詩文を鍛えあった。折しも西洋文化が隆盛にあり、伝統的漢学が世に合わぬことを憂え、晩年は宮内庁図書寮に精勤した。「才高く志は大、鬱屈伸びること無くして没す」と言う。「詩は尤も五言に長じ、風神魏晋に逼る。云々」と朴堂の評。朴堂の作文の批評に学圃の筆が多く見られる。

「櫻渓文鈔三巻」中村櫻渓撰　昭和二年刊（袋付）

朴堂の序文がある。朴堂より六歳年上である。明治五、六年の息軒先生晩年の時、朴堂はその塾で倉田幽谷がつれていた眉目秀麗な青年を見ていた。その後、先生の他界とともに東京を離れ、明治十三年再び上京、友人山井幹六を訪れた際に、紹介されたのが、彼、中村忠誠であった。植松有常らと廻瀾社に参加、また、以文会で朴堂と親しくその文を読み合うこととなった。学は、倉田師に学び、息軒、ひいては松崎慊堂の漢唐の学に帰依した。書は小島成齋の骨法を身に体していたという。「尤も叙事に長じ、出言簡奥、而して事理詳尽」と評される。従って、文の傾向は頗る朴堂に似通ったものが感じられる。「予、君と相ひ識ること五十余年、未だ嘗て其の疾言遽色を見ず。常に温温として言ひ、怡怡として楽しむ。久くして益々其の慕ふべく敬ふべきを見る。云々」と言う。昭和二年の時、朴堂も古稀を迎えていた。こうした、名利に恬淡とした学ある文人達との別れを惜しむ朴堂の悲しみは、晩年、同じように友人たちを失ってゆく息軒先生の悲しみそのものであったことが、しみじみと伝わってくる。

「虚室集二巻」鳥居虚室撰　大正十二年刊

虚室が大正五年に七十一歳で没した後、朴堂が編纂、序を冠して出版したものである。倣宋字体の瀟洒な冊子である。十二歳年下の朴堂が島田篁村の双桂精舎に入塾した明治九年、鳥居氏はそこで都講を勤めていた。「人となりは勤翼寡言、性は酒を嗜む。然れども竟に酔態を見ず。」「其の詩は平淡冲和、悠然として勢利の外に於いてす。絶えて不平蕭殺の気無し。所謂逸民なる者、予、由卿に於いて之を見る。」と。

「瓊琚集」昭和九年刊　倣宋活字

井上鋼太郎の七十歳古稀を祝した詩文集に「与井上寅軒賀古稀寿書」を寄せている。朴堂とは十年来の知り合いであった。

「篁村遺稿三巻」島田篁村撰　大正七年刊

言うまでもなく朴堂の先生である。明治三十一年六十一歳で没したが、大正七年長男の島田鈞一（第一高等学校教授）が遺文を編纂し、朴堂はその跋文を記している。この跋文は「朴堂遺稿」巻四に収められているが、やや文字の出入がある。ここには、朴堂の日本儒学の歴史に対する考えが述べられていて大変重要な一文である。「康曰く（朴堂の諱は朝康）、本邦経術の盛衰は、漢土と其の轍を同じくす。而して毎に彼に後るること或いは百年、或いは二百年、云々」と始まる。「蓋し、注疏の学は平安に盛んなり。南北朝に及んで、洛閩の説（宋の程顥・程頤、朱熹の学問）入る。元禄享保の際に至って、仁齋氏、徂徠氏、古学を東西に倡へ、程朱を撃排（遺稿は排撃）す。而る後折衷・考証二家出でて、以て今日に至る。（中略）仁齋・徂徠は其の説各異なると雖も、明儒の余習を脱する能はずんば則ち同じ。折衷・考証は則ち勦説のみ。雷同のみ。夷に之を考ずれば、皆、漢土の旧説（遺稿は成説）を襲ひ、其の後塵を追ふに過ぎず。（遺稿は更に一文あり。伊物二先生の達識を以てすると雖も未だ能く駕して之に上る能はず。）」「先師夙に此に慨きあり。歴代学案を著し、以て黄梨洲（「明儒学案」の著者、清の黄宗羲）の未だ及ばざるところを補はんと欲す。研精十余年、未だ脱稿せず。」と。「先師は、幼にして句読を大沢赤城（川越藩儒）に受け、長ずるに及んで海保漁村に従い漢唐の古学を治む。尤も詩・書・三礼に邃し。博聞宏覧、書に於いて通ぜざるところ莫し。史子百家より、文集、碑版、法書の類に至るまで、率ね定説有り。」

蔵書は宋元の精刻、また日本の古刊古抄を多く有し、現在、静嘉堂文庫、成簣堂文庫などに遺り、散じたものも少なくない。

「孤松詩鈔」佐藤孤松撰　昭和九年刊

会津藩士であった孤松もまた島田双桂楼の出身で、こうした文人が、西洋化する社会のなかで、各地に散って師範学校等の職に奉じたのであった。孤松も山梨、薩南と転じ、晩年、沼津に隠居して詩を詠んだ。「賀安井朴堂翁古稀」二首を載せる。

「春峯詩稿」　板倉中撰　昭和九年刊

板倉氏は、自由党の政治家で衆議院議員であった。上総のひと。明治十年、初めて会った時、話しぶりの軽快さに朴堂の印象が

強かった。政治家としての名前を見るたびにその時のことを思い出したと言う。朴堂塾の大橋兵太の後見人であったため、しばしば板倉氏と会う機会があった。筐底に眠っていた詩編を朴堂が校訂して梓に付した。昭和七年の朴堂の跋文を載せる。

「牀山遺藁三巻」　渋谷牀山撰　明治四十四年刊

朴堂は、村岡櫟齋、福井学圃とともに、本書の編集にあたった。渋谷氏は、通称は啓蔵。弘化四年（一八四七）彦根に生まれ、明治四十一年六十二歳で東京に没した。慶応一年（一八六五）江戸に出て経を若山勿堂に、文を中村敬宇に学び、藩学教授となって息軒先生に学ぶ。藩主井伊公が息軒の「左伝輯釈」を出版するに際して、その校訂を任じられた。朱子学が官学となっていた当時、漢唐の学を旨とする本書に接し、大いなる影響を受けた。学習院、高等師範に講じた。

「小石先生遺稿三巻」　河野小石撰　昭和九年刊

昭和四年に広島の饒津公園に建てられた石碑に碑文を、朴堂が撰している。広島藩の儒員で、文政七年（一八二四）生まれ、明治二十八年七十二歳で没す。朴堂の文は、幕末の政治状況を記し、儒者たるものが学をもって藩政を支える天晴れな姿をよく伝えた名文である。

「双峯文鈔三編四編」　佐藤双峯撰　昭和五・八年刊（袋付）

福島の相馬藩士であった双峯は、晩年の息軒先生に師事、迴瀾社、以文会等で活躍した。文の多くに、朴堂の評が加えられている。弘化四年（一八四七）に生まれ、昭和十二年に九十一歳で没するまで、作詩文と子弟の教育に努めた偉人である。相馬の藤門温故会が文集の編纂に当たっている。古城坦堂の序文に、「家塾を開き、菁莪の長育を楽しみて晨夕兀兀たり。文章を作為するに炳炳麟麟として、其の尊皇愛国の篇の若きは、以て諸国の門に懸け、而して後裔のために垂るに足れり。」と言う。

「大東唫社詩第一輯」　土屋久泰編　昭和十一年刊

大東文化協会発行の漢詩同人集。朴堂晩年の昭和十年に序文を記している。ここには、日本の近世の漢詩に対する朴堂の意見が述べられている。「元和建櫜、徳川家康首に林羅山を擢び、文教を振興す。石川丈山、深草元政等、皆詩を以て時に鳴る。然れども其の作、詞・義並びに拙なり。且つ未だ俗習を脱せず。

木門（木下順庵門）の諸子起こるに及んで、字句やや修整して誦すべし。唯、俗習未だ全くは脱せず。文化の前後に至りて、我が邦の詩始めて彼土と相ひ上下す。元和より文化まで幾ど二百年にして始めて之を能くす。難いかな、戛戛たること。世常に言う、邦人の漢詩を学ぶは、猶、陸に舟を推すがごとし、労にして功無ければ止むに如かず、と。予、嘗て絶海和尚の蕉堅稿を読む。其れ入明の作にして音節鏗鏘、詞義倶に優れたり。嚢の所謂邦人の詩にあらず。諸を彼土に求むるも数指を屈するに過ぎず。然らば則ち邦人漢詩を作る能はざるにあらず。蓋し教養の其の道を得ざるなり。今、海波熨の如し。舟車の往来は十日の行を容れず。人有りて留学十年、審研精求すれば則ち絶海を駕して之に上るは、必ずしも難からざるなり。」と。朴堂は晩年、ますますの文運の隆盛を願っていたのである。

「東嶽文抄」　石幡東嶽撰　明治四十三年刊

東嶽は、生卒年を明らかにしないが、明治時代の漢文界をリードした名士である。明治三十五年には、以文会の社約を作製している。これに拠れば、以文会というのは、安門（息軒門下）によって創られたものであることがわかる。東嶽も安門であって、安井文庫の「安門会名簿」にその名を連ねている。明治三十六年、朴堂が清国に出発するときに、序して「送安井某甫之清国序」を寄せている。それに拠ると、明治四年に東嶽は副使として清国に派遣された。その際、息軒先生の「論語集説」「左伝輯釈」「管子纂詁」を先生に託されて、天津で李鴻章・応宝時に贈った。二氏はその著作の精博に嘆服したという。今、朴堂が清国に行くのもけして偶然ではないという。こうした文章を読むにつけ、明治時代の漢学者は、考えが壮大で気が豪快であることに驚かされる。江戸時代の先師達の豪傑ぶりも、もって察すべし、というところであろうか。

「侗斎文集二巻」　駒田侗斎撰　昭和八年刊

侗斎は、廻瀾社の同人で、古城坦堂と親交があった。「安井朴堂先生七十寿序」を載せる。「会津游記」一文の中に、昭和七年、九月三日に朴堂、坦堂、井上寅軒とともに、会津若松を旅した思い出を記している。朴堂にもこの時の游記がある。白虎隊について記す朴堂の文勢を察するに、それは朴堂にとってよほど印象が深かったものと見える。

「夢界遺文三巻」　関口夢界撰　昭和四年刊（袋付）

安政三年（一八五六）生、大正十五年（一九二六）没。東京の人。安門。上海、台湾、大連などで活躍する。この文集の首に付す年譜を見ると、様々な土地を変遷していることに驚く。朴堂は、後序を記す。明治の初、息軒先生の三計塾で初めて会った時、剣を抜いて歌い、談は雄弁、烈士義士のことに及ぶと、涙を流して言葉を失ったという。その後、数十年、転々と各地の職に奉じた。しかし、文字の交わりをもってしたのは、朴堂だけであった。この集も朴堂の蒐編にかかる。嘗ての、「言談風発、意気虹の如し」という夢界の姿が蘇ってくる、と朴堂は述べる。

「六石山房詩文鈔十三巻」　佐藤六石撰　昭和四年刊

新潟新発田の人。昭和二年六十四歳で没した。朝鮮の王室の顧問を務め、国学院や慶応義塾で教鞭をとった。国分青厓等と詩会「星社」を開き、朴堂とは、崇文院でともに先哲の遺書を校刊した。

「清渓先生遺集九巻」　山井清渓撰　昭和四年刊

清渓は弘化三年（一八四六）生。明治四十年（一九〇七）卒。淀藩の内田氏の二男であった。西條藩の儒員、山井鼎（崑崙）は、「七経孟子考文」を著したが、没して家が断絶していた。夢に崑崙が現れた西條侯は、山井家の再興を計り、松崎慊堂に相談したところ、その高弟、渡辺介堂が再興に当たることとなった。しかし、介堂も文久二年（一八六二）に病をもって没した。その介堂の長女と結婚し、山井家を嗣いだのが、清渓である。通称は幹六と言った。明治になって、東京に移り、息軒先生の三計塾に入り、都講を勤めた。その後、富岡、前橋で教授にあたり、帰京後は、徳川家の教育等にあたり、学習院や第一高等学校に教鞭をとった。徳川頼倫はその教えをもって南葵文庫を創設した。朴堂の墓碑銘に詳細である。昭和四年、朴堂は本集の編纂に従事した。朴堂の最も信頼する先輩であった。

「論語講義」（遺集巻六―九）、「尚書講義」（哲学館）、「忠経補注」（明治十五年・文海堂）、「補注小学句読六巻」（明治十六年・金港堂）、「纂注純正蒙求三巻」（明治十七年・金港堂）等が遺る。

「悠久遺芳二巻」　長岡関係者編　昭和六年刊

長岡藩牧野忠精（龍徳公）を讃え、長岡の歴史や人物を詩文に編集したもの。朴堂は、編纂に携わった福島甲子三と交久しく、本書に序文を寄せている。朴堂は、かつて、少時、二松塾にあって、高橋子喬という人と同室であった。穎悟特絶、しかし声利華龍もその心を侵すことがない。独り大江寂寞の浜に読書吟誦するは、将に身を終ふる者の如し。と言うような豪傑であった。長岡は、北の大都、こんな豪傑がたくさんいてもおかしくはない。それにしても、龍徳公がこれほど立派な人物であったことは、まことに感慨深い、と述べている。

以上、安井文庫中の主な、朴堂とつながりの深い詩文集を簡単に紹介したが、詰まるところ、朴堂の人と学問は、こうした資料の中にこそ見出すべきなのであろう。まことに、血の通った、温かみのある蔵書である。

附　節　朴堂と清武

朴堂の貫籍は、宮崎の清武である。息軒先生の江戸の屋敷で生まれたが、先生の郷里が即ち朴堂の郷里でもあった。漢文を記す時も、「日向　安井朝康」と署名することが多い。朴堂にとって宮崎は地縁もさることながら、人との縁も極めて深いものがあった。

今、ここに、朴堂が記す「帰国の記憶」「上京の記憶」と題する、原稿用紙にペン書きの未刊稿がある。このような小文を大切に書き遺していることに、朴堂にとって、清武は、かけがいのないふるさとであったことが見て取れよう。

幕末の政情が急を告げて来た時、息軒先生は、自らの著作をまとめあげるかたわら、弟子達も含めた身辺の慌ただしい動きに対応していた。明治元年には、川口の領家に疎開するが、その前に、娘の須磨子と二人の子供（朴堂と姉）を清武に帰郷させた。自らはもう帰れないと知って、故郷への想いを小太郎に託したのであったか。明治四年、廃藩となって、情勢も落ち着き、再び上京するまでの六年間を、朴堂は飫肥で過ごしたのであった。その往復の記憶を記したものが、この小文である。

「帰国の記憶」

「慶応元年八歳七月十三日半蔵門外の宅を出づ、先妣伯姉従者上ノ山藩高橋祐之輔四人なり、同行宮医士家族五人、宮氏は備

後福山に帰るなり、高輪萬清にて見送人二十人計に午飯を供す、予は小島熊三（雲井龍雄氏）に負われて行きし事を後に聞けり、十五日夕刻小田原片岡屋に泊す、町に入りし時家々の前にて送り火たきしを今も記憶す、尾張宮宿より船にて桑名に至り伊勢参宮、亀山に帰り伏見に至り六七日滞留、八月初大坂土佐堀常安橋西の藩邸着、近傍の長州邸は破壊されて居たり、十月茂陵丸にて帰国、長倉玄圭同船、油津着は十一月初なりし、同人加茂の家に滞留、十二月清武中野高橋藤蔵の隠居所に寓す、一月北隣の賜邸に移る、阿萬豊蔵の旧宅なり、」

「上京の記憶」

「明治四年十四歳三月三日外浦乗船、飫肥藩より東京警衛の兵士三百人許上京する事となり、伊東祐之丞、石川孫四郎、津田貞衛、安井圭三郎等上京の便に附して上京せり、十五日の夜周防灘を過ぎ安藝某所に近づきし比暴風となり、船は逆行して十六日の夕刻三田尻に入り難を免れ、滞留二日にして発し順路兵庫に着し、伝馬に乗り換へ大阪藩邸に入れり、門外にて落合偉平氏に逢ひ、其の夜東京にて広沢参議暗殺の報を得、夜中提灯なしで通行する事を禁ぜらる、滞在五六日汽船明光丸にて品川沖着外桜田藩邸に入れり、兵士一同は小梅の常泉寺を本営とす、」

文中に見える雲井龍雄は、幕末の米沢藩士で、息軒先生門下である。奇傑をもって知られた。息軒先生は谷干城などこうした気骨ある人物を好み、三計塾では重用された。安井文庫に「雲井龍雄全集」一冊がある。

いずれにしても、この時の朴堂にとっての清武の思い出は、後年、川崎に居を選ぶ時に、清武に似ているからという理由であったことにも窺い知れるように、朴堂の人と学問を支える大きな要因となったのであろう。

また、朴堂の郷里への愛は、学問を背景にした考証という形でも遺っている。即ち、伊東氏の系譜である（図版四参照）。郷里飫肥藩の藩主伊東氏は、島津との長い戦国の歴史を経て、祐兵（すけたけ、一五五九～一六〇〇）の時、豊臣秀吉の九州征伐に功あって飫肥・清武を領し、飫肥藩の初代となった（天正十五年・一五八七）。その後、第十三代、祐相（すけとも・在位文化十一～明治二）は、藩校振徳堂を興し、滄洲先生を教授に招き、息軒もそこで教学にあたった。正に文武振興の名君

で、息軒はその墓碑銘を記している（文は、息軒遺稿巻四所載、原稿は、宮崎日南市の飫肥城歴史館にある。東京谷中の墓地にある伊東氏の墓石に刻まれている）。堕胎の禁止、養老の勧めなど数々の善政を敷き明治六年六十三歳で東京に没した。息軒下世の三年前であった。その碑文に「飫肥は東京に距つること二千四百里、茅土（領土）既に絶ゆると雖も、臣民の来候する者、路に相ひ望む。」とあるように人々はその徳を慕った。

そこで、その伊東氏の戦国時代以前の祖先を辿ると、平安時代の武将、工藤祐経にまで遡るのである。

息軒の伊東氏碑文に言う。

「伊東氏の先は、藤原鎌足に出づ。鎌足の次子を武智麻呂という。武智麻呂八世の孫為憲、木工頭に任ぜられ、始めて工藤と称す。」と。

朴堂の考証によれば、藤原の藤と、木工頭の工をとって工藤と称した。碑文に言う。

「伊豆の押領使となり、蒲原郡に居る。其の支族は猶伊藤と称す。」と。

朴堂の稿によれば、為憲の孫時信が伊豆国伊東の庄に移り、時信の四代、維職が伊豆国押領使となり、伊藤庄に移住し、伊藤と名乗った、という資料を挙げ、伊東か伊藤か何れが是かは不詳であると。

碑文に言う、

「（中略）祐経因りて、旧封を復するを得、頼朝に仕えて寵有り、併せて三十四邑を諸州に賜ふ。」

朴堂によれば、維職、家継、祐継と嗣いで、祐継の子祐経、幼名金石丸が、建久元年（一一九〇）頼朝より日向地頭職を命じられ、同年、肥前の国大田庄の地頭職にも任じられたが、建久四年五月二十八日曽我兄弟のために討たれた。四十二歳。

また、碑文に言う。

「（祐経の子）祐時の玄孫を祐持と曰ふ。是の時に当たりて天下大乱、足利尊氏、祐持に命じて日向に住せしめ、探題を助け、以て九州を鎮め、都於郡（とのこうり）に居る。」

朴堂言う、祐持、建武年中尊氏に属し日向都於郡三百町の地を賜る、始めて日向に下向す、と。

このように、朴堂の自筆の詳細な原稿は、日向代々の君主の事跡をまとめたものである。そして、その為の資料として、「伊東氏記録」大冊のほか、「藩翰譜」「島津家譜」「大日本史」

「野史」等の関連する記事を抜抄させている。平部嶠南（飫肥藩儒・息軒門下）の「日向纂記」も、引用書目を徴するなどして参考に附している。安井文庫の中にも、「伊東誌」六冊があって（52D／3／2）、明治四十年に伊東町の大原氏より借りてうつしたものがある。朴堂は、これを詳細に読み、朱にて校訂を加えている。もって、朴堂の充実した伊東氏系譜研究の実態を察するべきであろう。